

[12]

氏名	黄俊傑
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学位記番号	博第468号
学位授与の日付	平成25年9月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	東アジア思想交流史 ー中国・日本・台湾を中心として
論文審査委員	主査教授 陶徳民 副査教授 二階堂善弘 副査教授 藤田高夫

## 論文内容の要旨

本論文は、中国・日本・台湾および朝鮮の相互交流の歴史過程で、東アジアという地域全体および域内各国のアイデンティティーはいかに創られてきたかという問題を思想文化面から検討した力作である。論文は「理論編」(第一、二章)、「中日交流編」(第三、四、五、六章)および「台日交流編」(第七、八章)という三部から構成されている。

第一章では、「一国史観」から脱却した「地域史 (regional history)」という新しい研究の流れとその問題意識の重要性を説くと同時に、人・物(特に書籍)・思想の交流を研究する方法論の転換、すなわち「結果」重視から「過程」重視への転換、および「自我」と「他者」、「文化」と「政治」の間の緊張関係への注目などを論じた。

第二章においては、東アジア文化交流史における異なる地域間の交流が伴う「脈絡転換」(テキストがコンテキストによって脱脈絡化・再脈絡化されること)の現象を分析し、研究の際に「テキスト主義」と「脈絡主義」との間、及び「事実」と「価値」或いは「情感」の間においてその動態的バランスを取らねばならないということを指摘した。

第三章では、十八世紀の中国・日本・朝鮮における儒学の多元的展開の中で、反朱子学・反形而上学、および「実在」における「本質」探究の強調という二つの思想傾向に共通性があったものの、三国それぞれの主体意識のあり方において趣を異にしていることを明らかにした。

第四章においては、十七世紀から二十世紀にかけての日中文化交流史を例に、文化や政治上の「自我」と「他者」の相互影響過程において現れた四種類の緊張関係、すなわち「政治的自我」と「文化的自我」、「文化的自我」と「文化的他者」、「政治的自我」と「政治的他者」、「文化的他者」と「政治的他者」の間の緊張関係およびその意義を分析した。

第五章では、明清交代期に日本に渡来した儒者朱舜水(1600-1682)と戦後台湾に渡った新儒家、徐復観(1904-1982)の日本見聞と日本観に顕れた「自我」と「他者」の関りが理論的に何を意味しているかを検証した。

第六章においては、古代中国において形成され、東アジア思想史上において極めて指標的な概念となった「中国」の意味合いが近世日本や現代台湾でどのような変転を経ている

かを分析した。

第七章では、外交官上野専一（1891年訪台調査）、啓蒙思想家福沢諭吉（1834-1901）および漢学者内藤湖南（1866-1934）など三名の日本人が台湾割譲前後に発表した台湾統治政策論に現れた日本知識層の「脱亜入欧」の思想傾向とその問題性について検討を加えた。

第八章においては、「光復」初期（1945-1950）に大陸から台湾に渡った政治家や記者などの人々の観察記録および日本の在台殖民政府が撰した『台湾統治終末報告書』にもとづき、返還初期の台湾人と大陸人の「光復返還経験」の異同という問題を取り上げ、「アイデンティティー」形成における文化的基礎と政治的要素との相互関係について論じた。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、論文提出者がその深い学殖に基づき、欧米・日本・中国および台湾における近年の文化交渉研究の理論と成果を広く吸収したうえで構成した意欲的労作である。第一に、「地域史」や「脈絡転換」など新しい研究領域と研究方法論を積極的に提示し、その効用と意義を実例でもって力説した。第二に、儒学経典のテキストが東アジア各国の社会背景と言語的脈絡に適應して再解釈されていくという共通現象に着目し、そこに現れた「事実」認定・「価値」判断および「情感」作用などを要因とした文化交渉の動態および当事者の主体意識の異同を分析した。第三に、近世以降の東アジアの政治変動期（王朝更迭、政権交代および植民地の支配と返還など）の一次史料を通じて、「アイデンティティー」の形成と変化における文化的基礎と政治的要素の間の微妙な関係を構造的に解明した。これらの点は高い評価に値し、論文の全体はすぐれた文化交渉学研究の手本と手引きとなっている。しかし、所論の対象が多岐にわたるため、たとえば荻生徂徠の主体意識の変遷など一部の人物や事例に関する背景の説明が不十分な面もある。